板　付

県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書 (2)
福岡市埋蔵文化財調査報告書第48集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

1978
福岡市教育委員会

板　付

県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書 (2)
福岡市埋蔵文化財調査報告書第48集

1978
福岡市教育委員会

序　文

福岡市教育委員会では、県道505号線の新設改良に伴う埋蔵文化財の発掘調査を、昭和51年度から昭和52年度にかけて実施しました。

この報告書は、昭和52年度の調査記録であり、昭和51年度の調査記録福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集に続くものであります。

発掘調査の記録としては、満足すべきものではありませんが、関係者のご利用に供しうれば幸甚に存じます。

調査に際しましては、地元の方々を始め関係各位のご理解とご協力をいただきましたことに、心からの感謝を申し上げます。

昭和54年２月

福岡市教育委員会

教育長　戸　田　成　一

本 文 目 次

序 …… 1

Ⅰ　Ａ５区の調査

　１　調査概要…… 3

　２　遺構…… 3

　３　遺物…… 9

　４　まとめ……19

Ⅱ　Ｂ２区の調査

　１　調査概要……22

　２　遺構……22

Ⅲ　おわりに……23

図 版 目 次

PL. Ⅰ　Ａ５区第１号溝（東から

　　Ａ５区第３号溝（東から）

PL. Ⅱ　Ａ５区第２号溝（北から）

　　Ａ５区青灰色砂質土層出土土器

PL. Ⅲ　Ａ５区青灰色砂質土層出土土器

PL. Ⅳ　Ａ５区褐色粗砂層出土土器

PL. Ⅴ　Ａ５区褐色粗砂層出土土器

PL. Ⅵ　Ａ５区上部包含層出土石器

　　Ｂ２区トレンチ（東から）

PL. Ⅶ　Ｂ２区トレンチ東側（北から）

　　Ｂ２区トレンチ西側（北から）

挿 図 目 次

第１図　県道付近地形図……折込

第２図　Ａ５区地形図…… 4

第３図　第１号溝実測図…… 5

第４図　第２号溝・第３号溝・ピット実測図…… 6

第５図　第２号溝杭・矢板列実測図…… 7

第６図　土層断面図…… 8

第７図　青灰色砂質土層出土土器実測図…… 9

第８図　褐色粗砂層出土土器実測図……11

第９図　上部包含層出土土器実測図(1)……14

第10図　上部包含層出土土器家測図(2)……15

第11図　上部包含層出土土器実測図(3)……17
第12図　上部包含層出土石器実測図……19
第13図　B 2 区地形実測図……21
第14図　竪穴状遺構実測図……22

例　　言

1. 本報告書は、県道505号（板付・牛頸・筑紫野）線新設改良に伴い、福岡市教育委員会が1976・1977年に実施した発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した図の作製は、遺構を調査担当職員・調査補助員・参加学生、遺物は土器を沢皇臣・森瀬圭子、石器を山口譲治・沢があたり、製図は沢が行った。
3. 本書に使用した参考文献は各章ごとではなく末尾に一括した。
4. 本書に使用した写真の撮影は沢が行った。
5. 本書の執筆・編集は沢が行った。

序

昭和51年度から、県道板付一牛頸一筑紫野（505号）線の新設改良に伴う発掘調査が板付5丁目で行われ、その一部の報告はすでに刊行されている（沢・横山1977）。本報告はこの発掘調査のうちA5区、B2区と名称した地区の調査報告書である。

A1～4・B1区の調査は、前述報告書を参照願いたいが、一部訂正があるので、各区の概要を次に記す。

A1区　弥生時代前期の袋状竪穴4、弥生時代の竪穴3、中世の地下式横穴1（これは沢・横山1977では第14号袋状竪穴、第6号竪穴としていたもので、第14号袋状竪穴は一部に前期末～中期初頭の袋状竪穴との切り合いの可能性を残すが、地下式横穴の玄室、第6号竪穴はその竪坑部と考えられる）、中世以降の竪穴2（このうち第5号竪穴は1978年度調査のF－6地点の地下式横穴の玄室とも考えられる）、および小ピット群である。

A2区　弥生前期の袋状竪穴6、および小ピット群を検出。

A3区　弥生時代中期初頭の袋状竪穴1、中世の地下式横穴1（これは第12号袋状竪穴としていたもので、第1号土坑としたものはこの地下式横穴に伴うものかもしれない）、中世以降の土坑1が検出されている。

A4区　弥生時代中期初頭の住居址1、中期末～後期初の井戸址1、弥生時代の竪穴遺構2、土坑墓1、住居址とみられるピット群2、古墳時代の土坑2、中世以降の井戸址1が検出された。

B1区　弥生時代前期の袋状竪穴3、中世以降の竪穴1が検出されている。

この他に、A2区第5号袋状竪穴からナイフ形石器、A4区表土層から細石核が出土しているが、包含層は消失したものと考えられる。

今回調査のA5区は板付台地の西側水田部であり、台地端および沖積地の生産遺構の存在が予想された。またB2区は、この地が銅剣・銅矛を副葬した甕棺墓地として有名な田端遺跡であり、墓地の一部の残在が予想されていた。しかしながら、A5区は1978年調査で確認された夜臼式単純の排水溝の一部を調査しながら、激しい湧水のためにその性格を明らかにすることができなかった。また包含層の調査も調査期間が必らずしも充分とはいえず、一部スコップで行ったため、下層と上層の土器の分離が明確でなく、夜臼式単純層である青灰色細砂層に上層の土器の混入がみられた。B2区はすでに大正5年に土取り作業で水田化されており、その後再び埋土を行って植木畑となっていた。包含層、遺構ともにすでに消滅して、かろうじて性格不明の弥生時代竪穴が一部残っていたにすぎない（このB2区の北側に弥生時代中期末～後期初の井戸址1を1978年度調査）。

A5区は昭和52年11月から12月、B2区は昭和52年12月に調査を実施した。

調査の担当は福岡市教育委員会文化課板付遺跡調査事務所が行い、A5区は現場作業を沢皇臣・山口譲治・横山邦継、B2区は山崎純男・沢皇臣・山口譲治・横山邦継、事務を楢崎幸利・安田正義・河鍋好輝が担当した。

石器願の材質鑑定は当時秋芳台科学博物館学芸員（理学博士）太田正道氏（現北九州市立自然史博物館準備室）に依る。

調査にあたって下記の方々に多くの援助を受けた。記して感謝する。（敬称略）

中原志外顕・江浜明徳（博多工業高校教諭）

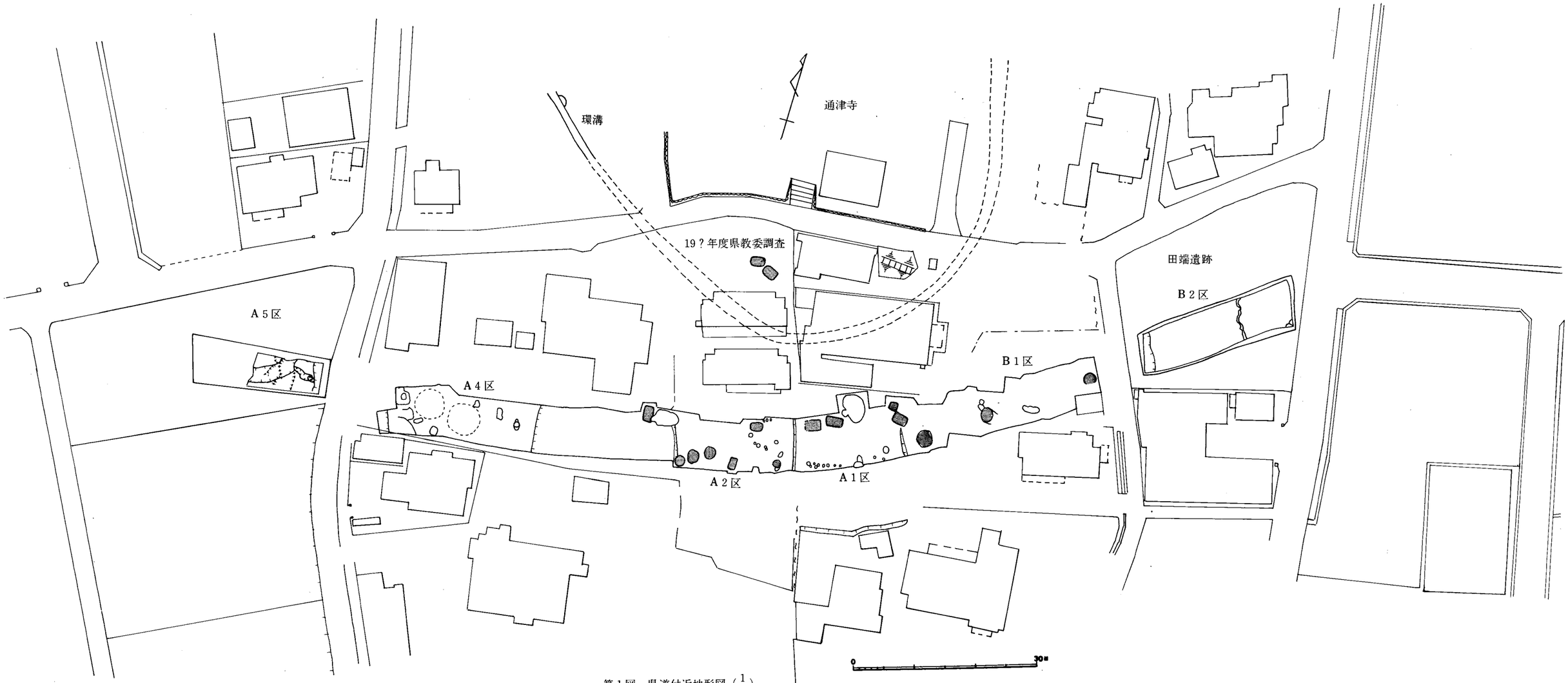
地元　中牟田久人・山口経則

調査作業員　大部茂久・屋山利久・中牟田顕勲・金堂和雄・糸山政雄・舎川キチエ・永松伊都子・谷フジエ・河鍋ミツル・稲永てつ子・勝野孝子・宿久光枝

調査補助員　原俊一・前田義人・曽根田論・奈良崎和典

参加学生　為貞由紀・市橋重喜・久保智康（以上九州大）森瀬圭子（奈良女子大）

整理補助員　木村良子



第１図　県道付近地形図（$\frac{1}{600}$）

Ⅰ．A５区の調査

1　調査概要

Ａ５区は板付台地の西側低地、環溝から約70m南西側にあたる。近年まで水田として使用されていたが、埋土されて植木畑として利用されていた。水田面の標高は約8.7m。先のＡ４区調査の際、地山である鳥栖ローム層が南北に走る道路付近で後世の削平により急速に落ち込んでいたために、当初遺構の存在はあまり予測していなかった。

調査はまずユンボで埋土および水田耕土層、水田床土の排除を行った。その時点で暗褐色の遺物包含層があらわれた。この包含層は多量に遺物を含み、そのほとんどが弥生式土器であるが、時期的には弥生時代の各期があり、しかも、土師器、須恵器、磁器等も含んでいることから、一部は台地から流れ落ちた二次堆積、一部は中世・近世の水田作成のための客土層と考えられる。この包含層を取り除くと青灰色砂質土層があらわれ、それを掘りこんで第１号溝が西から北へゆるやかに弧を描いて走っていた。この溝中には黄褐色の粗砂のみが堆積していた。青灰色砂質土層は遺物を含んでいたのでさらに掘りすすめると東側には黒色粘質土層があり、それを切ってトレンチ東端に河川跡と思われる砂の充満した溝があらわれた。この溝は湧水が激しく、また道路に近いために詳細な調査は行えなかった。第１号溝の下に黒色粘質土層、黄褐色粘土層（鳥栖ローム層）、八女粘土層を切って第２号溝が南北に走り、その第２号溝に向かって河川跡から第３号溝が存在する。

2　遺　構

(1)第１号溝（第３図）

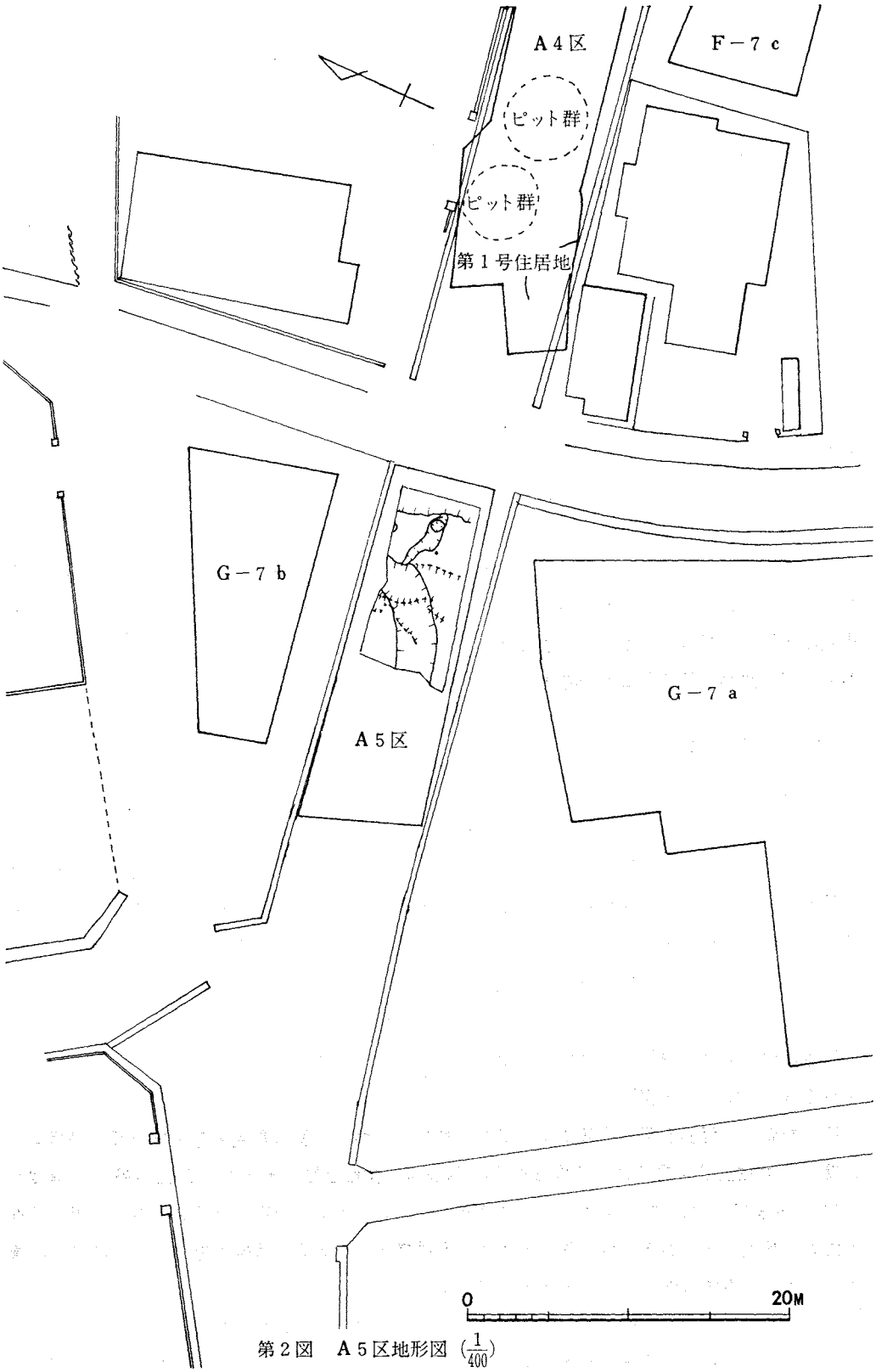
第１号溝は弧を描くようにトレンチの西側から北側へ向かっている。青灰色砂質土層を掘って作られ、幅約2.5m、深さ約90cm、断面「Ｕ」字形を呈する。トレンチ北壁付近で一部黒色粘質土層、鳥栖ローム層を切り、溝底が八女粘土層になっている所もある。溝中は黄褐色粗砂で覆われ、この溝が一度に埋もれたことを示している。また、自然遺物(種子・木葉・細流木)等も多かったが、未鑑定である。人工遺物は何も出土せず、時期判定は困難であるが、夜臼式単純の第２号溝（1978年調査で夜臼式単純の溝と判明）が埋れてから作られていること、上部に弥生時代～中世の遺物を包含する土層があることから、弥生時代のものと考えられる。

(2)第２号溝（第４・５図）

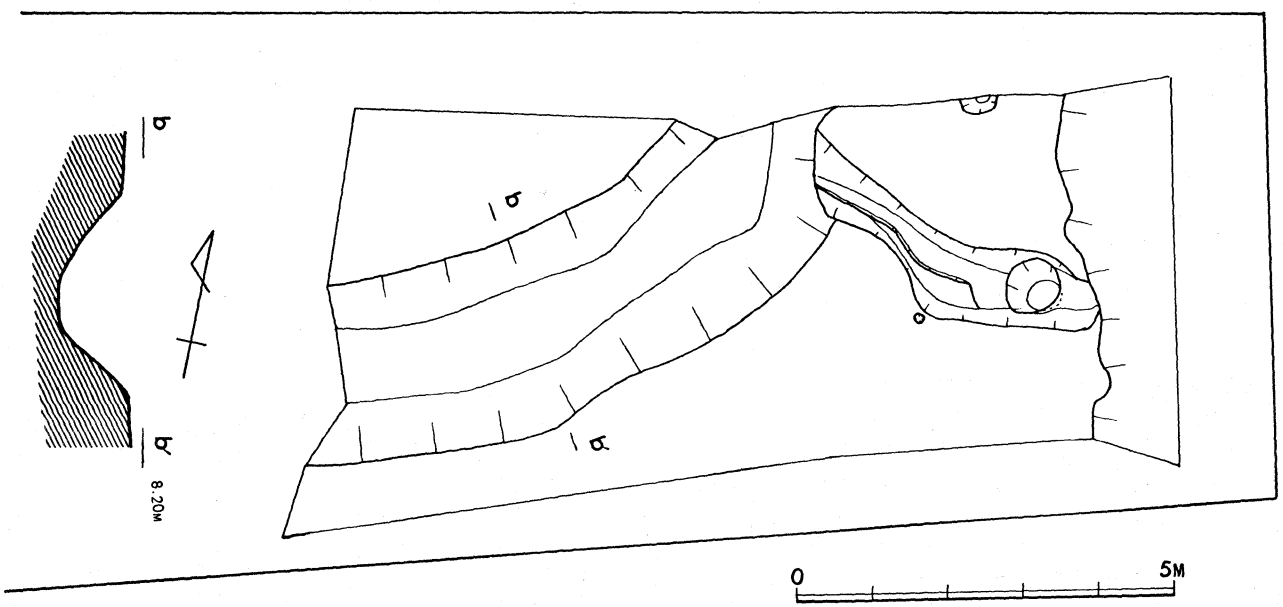
第２号溝は、西側を第１号溝によって切られているが、東側は黒色褐色粘質土層、鳥栖ローム層、八女粘土層を掘り込んで作られる。溝底は八女粘土層であるが、凹凸が多い。幅は約2.5m、溝底では約1.5m、深さは約１mであり、南北に走る。上部にある第１号溝と重なる様に西側に溝状のものがあるが、溝かどうかは不明である。あるいは排水施設かもしれない。溝中からは自然遺物以外はほとんど出土していない。

溝底西側には矢板・杭列がみられる。これらは護岸的な用途をもつものであろう。

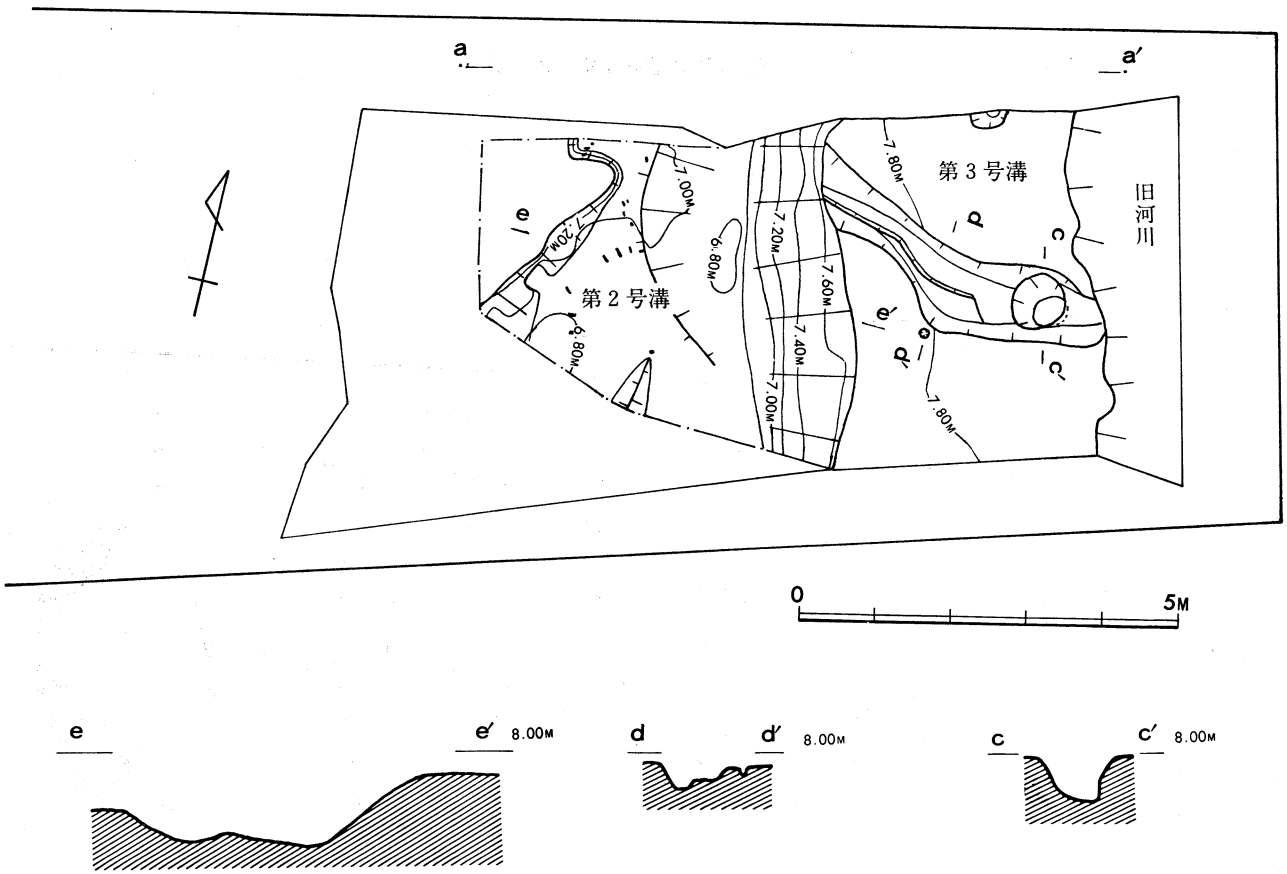
第２号溝は小範囲の調査で湧水が激しく、調査に若干の誤りを犯していたために、時期は不



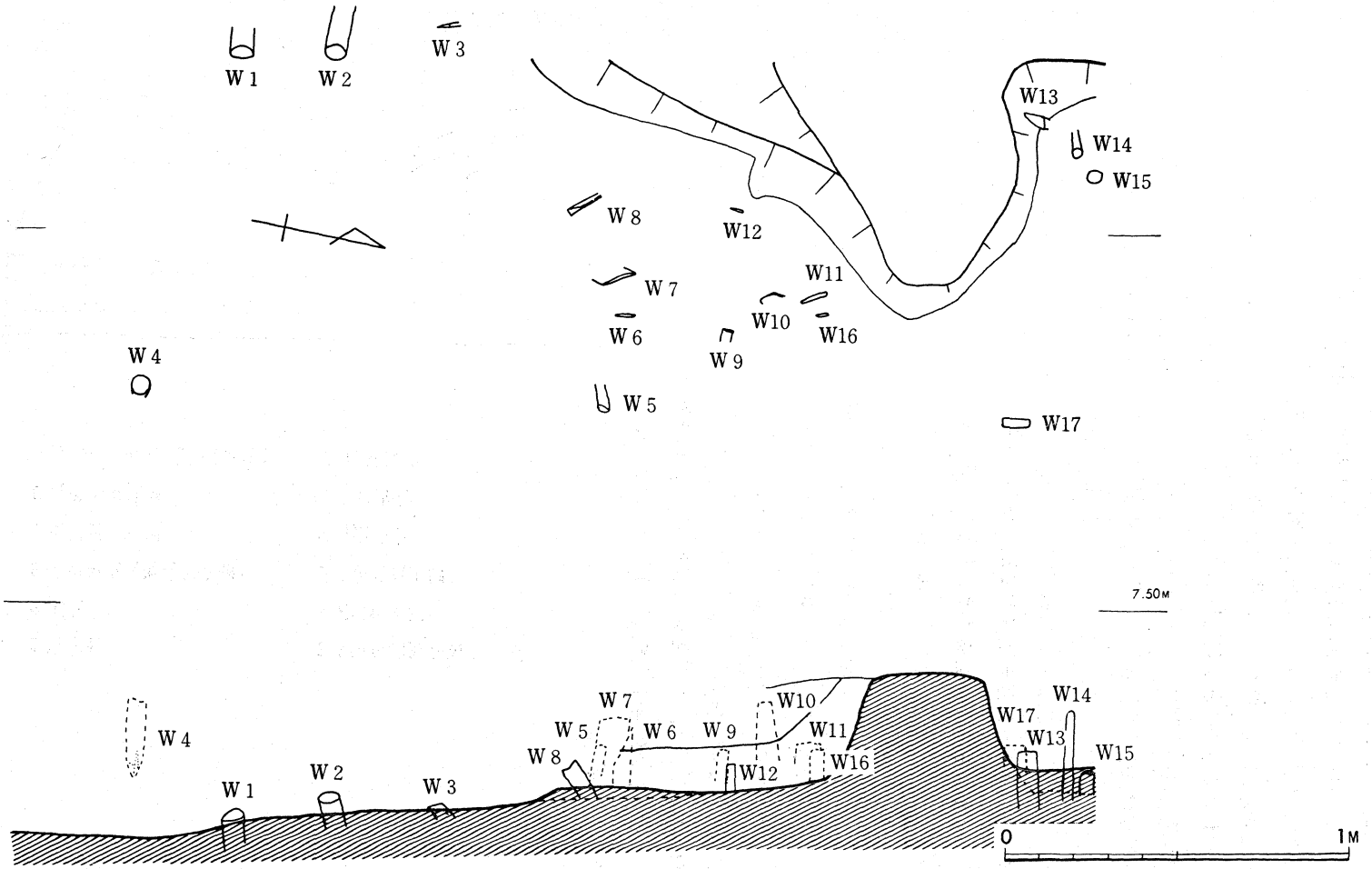
第2図　A5区地形図（$\frac{1}{400}$）



第3図　第1号溝実測図（$\frac{1}{100}$）



第4図　第2号溝・第3号溝・ピット実測図（$\frac{1}{100}$）



第5図　第2号溝　杭・矢板列実測図（$\frac{1}{20}$）

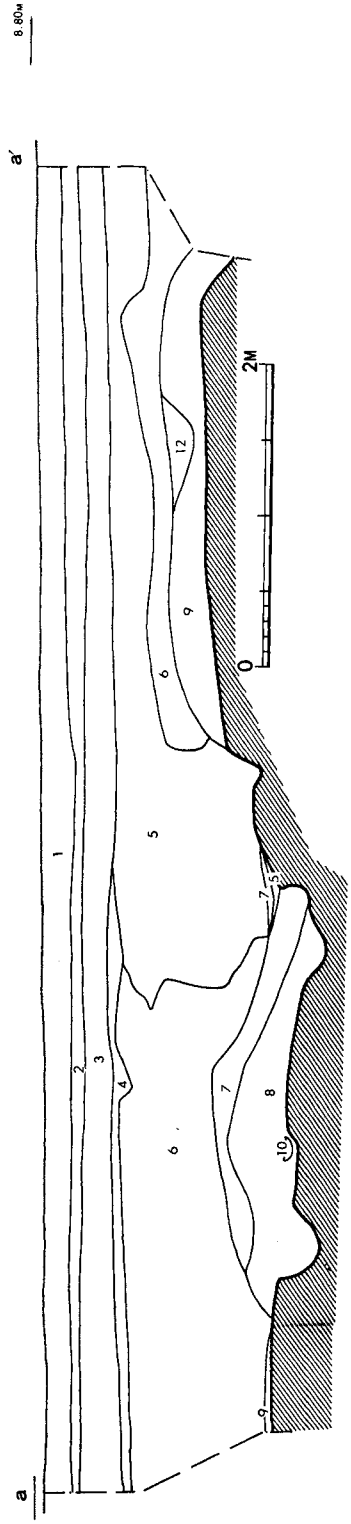
明であった。しかし、1978年、Ａ５区に隣接する南北のＧ－７ａ、Ｇ－７ｂ地点（本来はＡ５区とともに一枚の水田）の調査が行われ、縄文時代終末の夜臼式単純の時代の溝が確認された。この第２号溝は、それにつながるものであることが判明した。

⑶第３号溝（第４図）

第３号溝は東側を小河川跡に切られ、西側も第１号溝によって切られている。幅は約0.5～１ｍ、深さは約30cm。黒色土層を掘って作られている。断面は「Ｕ」字形を呈するが、西半は南側に段がつく。東側にピットが１個存在する。遺物はほとんどないが、1978年調査より、弥生前期のものと考えられる。

⑷ピット（第４図）

３個あり、いずれも東側の黒色粘質土層より掘り込んでいる。ピット１は北壁下にあり、南半しか調査していないが径約50cm、深さ約25cm。ピット２は第３号溝内にあるもので径約70cm、深さ約30cm。ピット３は第３号溝の南側にあるもので径約15cm、深さ約10cm。ピット２は第３号溝に伴うものと考えられるが、他は時期不明。



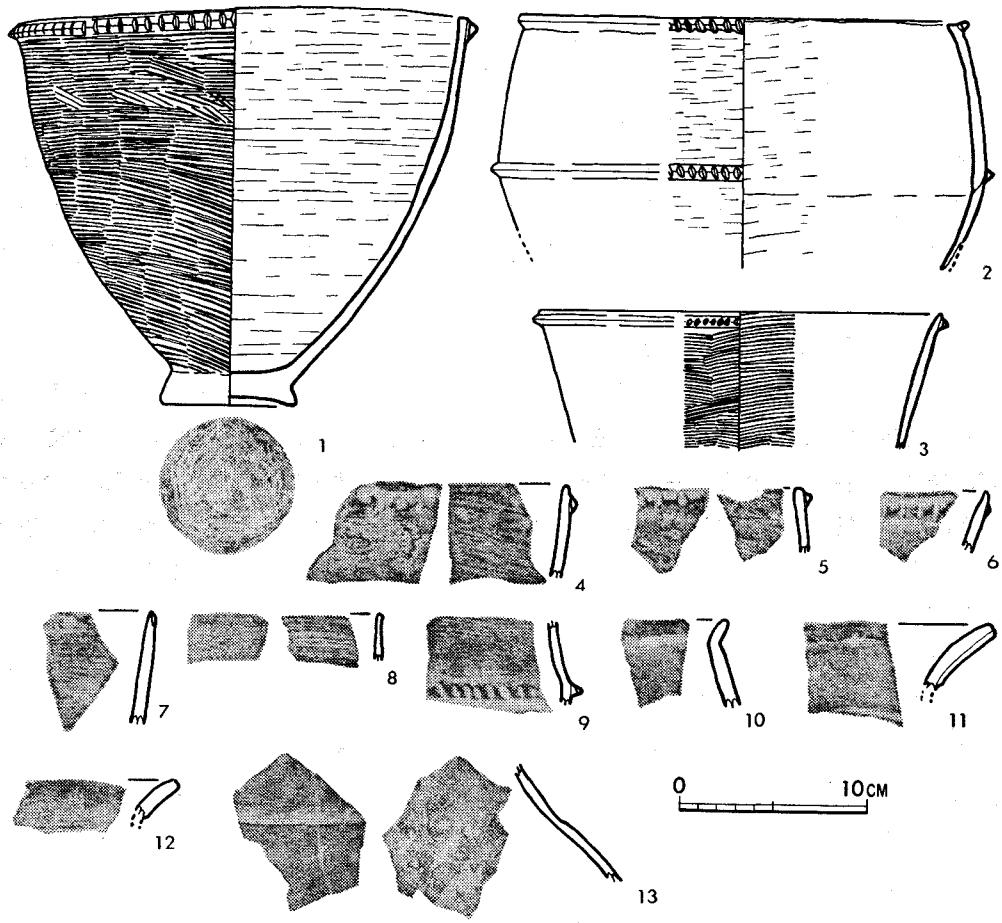
1 耕作土　7 灰黒色粘質砂層
2 床土　8 灰黒色砂層
3 暗褐色土（遺物包含層）　9 黒色粘質土層
4 暗褐混土砂層　10 黄褐粘土
5 黄褐色粗砂層　11 八女粘土
6 青灰色細砂層（土器を含む）　12 黄褐粗砂層

第６図　土層断面図（$\frac{1}{50}$）

3 遺 物

(1) 青灰色砂質土層出土の土器（第7図）

深鉢（1～9） 1は内湾する口縁部からゆるやかに底部へとすぼまる器形をもち、底部は台形状を呈し、上げ底をなす。口縁直下には刻目突帯が巡らされ、口縁端は角張る。外面は横、斜めの貝殻条痕調整。底部外面は指の押圧調整で条痕はない。底部下面は篦状の工具の擦痕がつけられる。外面上半部には煤の付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。暗褐色を呈する。器高21.4cm、口径23.9cm、底径7.2cm。2は内湾しながら内傾する口縁部と球形に近い胴部をもつ。口縁部と胴部最大径部に刻目突帯を巡らす。口縁の突帯は口縁端より高くつけられる。口縁端は角張る。内外面とも擦痕が認められる。外面には煤の付着があり、黒褐色を呈するが内面は黄褐色。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。推定口径24cm。3はわずかに外反しながら口縁部から底部へとすぼまる器形をもつ。口縁直下に刻目突帯を巡らす。口縁端は丸味をもつ。内外面ともに細目の貝殻条痕調整。内面には一部炭化物の付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色、淡赤褐色を呈する。推定口径21.6cm。4はわずかに外に開く



第7図　青灰色砂質土層出土土器実測図（$\frac{1}{4}$）

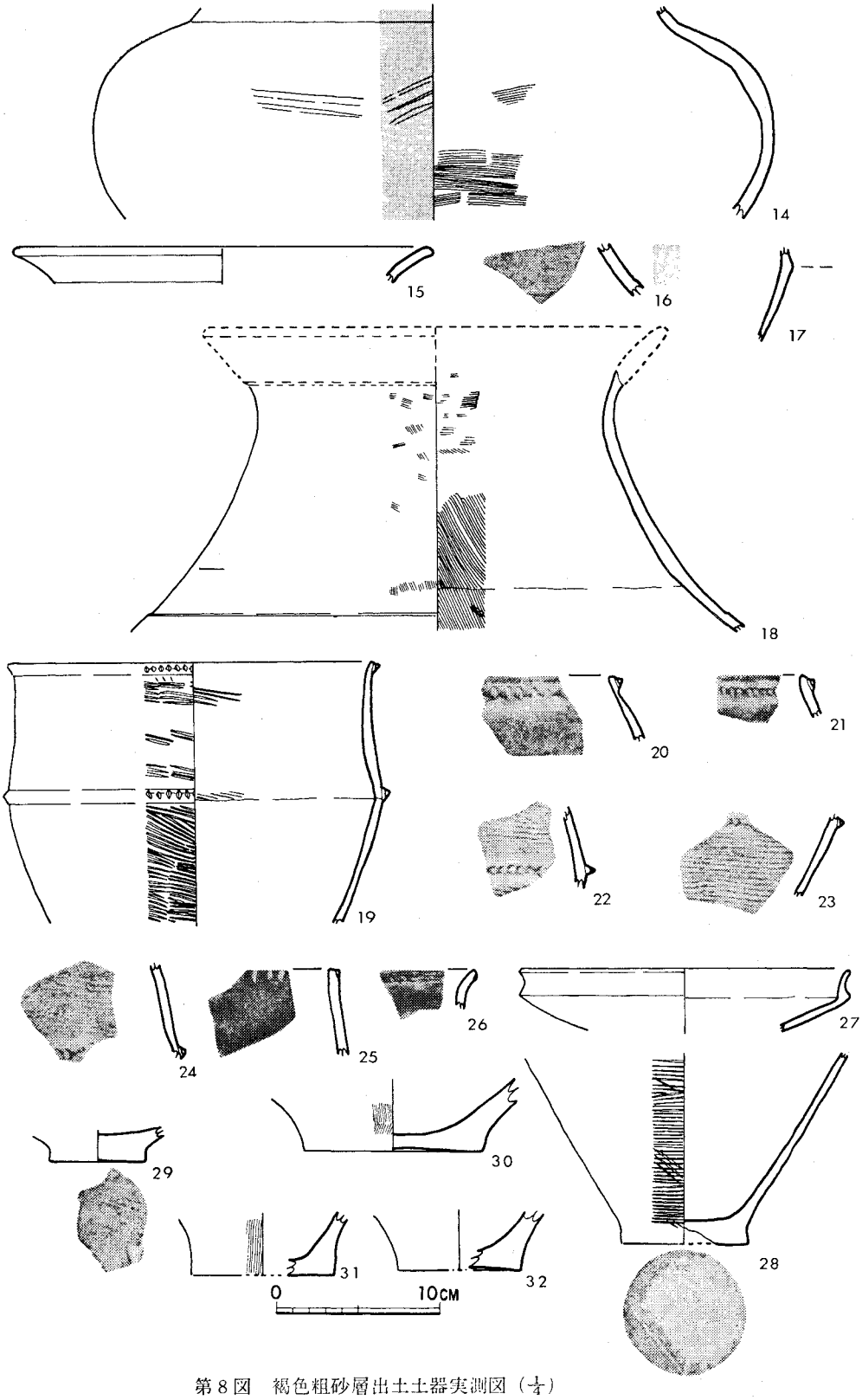
口縁部で、口縁端は丸味を帯びる。口縁直下に刻目突帯を巡らす。外面は擦痕、内面は斜めの貝殻条痕。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黒褐色。**5**は内傾する口縁部をもち、口縁端は角張る。口縁直下に刻目突帯があり、その上下は接合のために横なで調整。内外面とも貝殻条痕調整。外面には煤が付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。**6**は外反する口縁で、口縁端は丸味を帯び、口縁直下には刻目突帯が巡る。外面に煤付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗茶褐色。**7**はわずかに外に開くがほぼ直立に近い口縁部をもつ。口縁端は丸味を帯びるが突帯はつかず、口唇部に直接刻目がつけられる。外面は横の貝殻条痕。内面口縁部は横なで調整。外面には煤の付着も認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。**8**はほぼ直立する口縁をもち、口縁端は丸味を帯びる。刻目も突帯もつけられない。内外面とも貝殻条痕。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黒褐色を呈する。**9**は胴部最大径の屈曲部に刻目突帯がつけられる。外面は貝殻条痕で煤の付着が認められる。胎土に石英砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。以上はいずれも夜臼式に属する。

壺（10～13）　**10**は口縁部が短く「く」の字状に外反する。外面と内面口縁直下まで篦で磨研される。内面はなで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黒色を呈する。**11**は外反して肥厚する口縁部で、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色。**12**も**11**と同様の口縁部であるが、外への張りは弱い。全体的に篦横磨研。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黒褐色。**13**は胴部破片で、頸部と胴部の接点に段がつけられる。外面は篦で磨研されるが段の上部は棒状の工具でなでた痕跡が残る。内面は指の押圧調整痕がみられ、その上に斜めの刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面黒色、内面暗褐色を呈する。これらの土器は**11・12**を除いては夜臼式である。**11**、**12**は板付Ⅰ式と思われるが、これは調査の際の不注意による混入である。

(2)　褐色粗砂層の出土遺物（第8図）

壺（14～18）　**14**は口縁部、底部を欠く。胴部の張りは強い。外面はヘラの調整、内面は横の細い刷手目調整。内面には指の押圧調整痕が多く残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好、暗褐色を呈する。外面に一部丹の痕跡がある。**15**は外反する口縁部で、口縁下に低い段がつき、横なで調整。胎土に砂粒を混じ、焼成良好、暗褐色を呈する。**16**は頸部から肩部へ移行する部位で、その移行点に沈線状の段がつけられる。外面は丹塗りで、横に篦磨研。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、外面赤褐色、内面暗褐色を呈する。推定口径25.4cm。**17**は胴部片で最大径部位が角張り、稜がつく。外面は篦なで、内面は指なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色内面黒褐色を呈する。**18**は口縁部と肩部以下を欠くが、残存部からみて、口縁部は肥厚するものと考えられる。頸部と肩部の境界には段がつけられる。外面は各方の刷毛目調整の後、篦でなでて消しているが一部残る。内面も頸部上面は横、斜めの刷毛目調整の後で、篦なで調整。以下は斜めの刷毛目調整で、指の押圧調整痕も残る。以上の土器は**16**、**17**が夜臼式、他は板付Ⅰ式と思われるが、**14**は夜臼式の可能性もある。

深鉢・甕（19～26）　**19**はわずかに外反する口縁部とゆるやかに反転する胴部をもつ。口縁下と、胴部反転部に刻目突帯を施す。口縁下突帯の刻目を施した時に強すぎて、一部突帯下部



第8図　褐色粗砂層出土土器実測図（$\frac{1}{4}$）

にまで篦状の工具痕が残る。外面は貝殻条痕を施すが、胴部突帯以上はその後で篦なで調整をして一部を消している。内面も屈曲部以上は、貝殻条痕を篦なで調整で消しており、それ以下も篦なで調整。外面の口縁部突帯以下から、胴部突帯以下約4～5cmの部位まで、煤の付着がみられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。推定口径21.8cm。**20**は内傾する口縁部で、口縁直下に刻目突帯をもつ。内面は横なで調整。外面には煤が付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、黒色、暗褐色を呈する。**21**も内傾する口縁の直下に刻目突帯をもち、口縁部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色。**22**～**24**は胴部破片で屈曲部に刻目突帯をもつ。いずれも外面は貝殻条痕。**22**は突帯以上に煤の付着がある。胎土に砂粒を含み、焼成良好、内面と外面突帯以上は黒色、外面突帯以下は褐色。**23**の内面は篦なで調整。外面突帯以下の一部に煤の付着が認められる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面赤褐色。内面黒色を呈する。**24**は外面の一部に刷毛目調整もみられる。外面突帯以上は煤付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、外面黒色、内面暗灰色。以上の**19**～**24**は夜臼式の深鉢であろう。**25**はわずかに内傾する口縁部で、ほぼ直立に近く、口縁端は角張っている。突帯はみられず、口縁外端に篦状の工具で刻目がつけられる。口縁上端は横なで調整。内面は指で押圧調整の後、指で斜めになで調整。外面は煤付着。胎土には石英粒砂を含み、焼成良好、外面黒褐色、内面暗褐色。この土器はG－5a地点〔山口1976〕の例から、夜臼式と板付Ⅰ式が共伴する時期のものと考えられる。**26**は外反するいわゆる如意状口縁の下端に刻目をつけるもので、口縁部の外側への延びは少ない。口縁部内外は横なで調整だが内面の口縁下約1cm以下は横刷毛目調整。外面には煤の付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面黒色、内面暗褐色。板付Ⅱ式であろう。

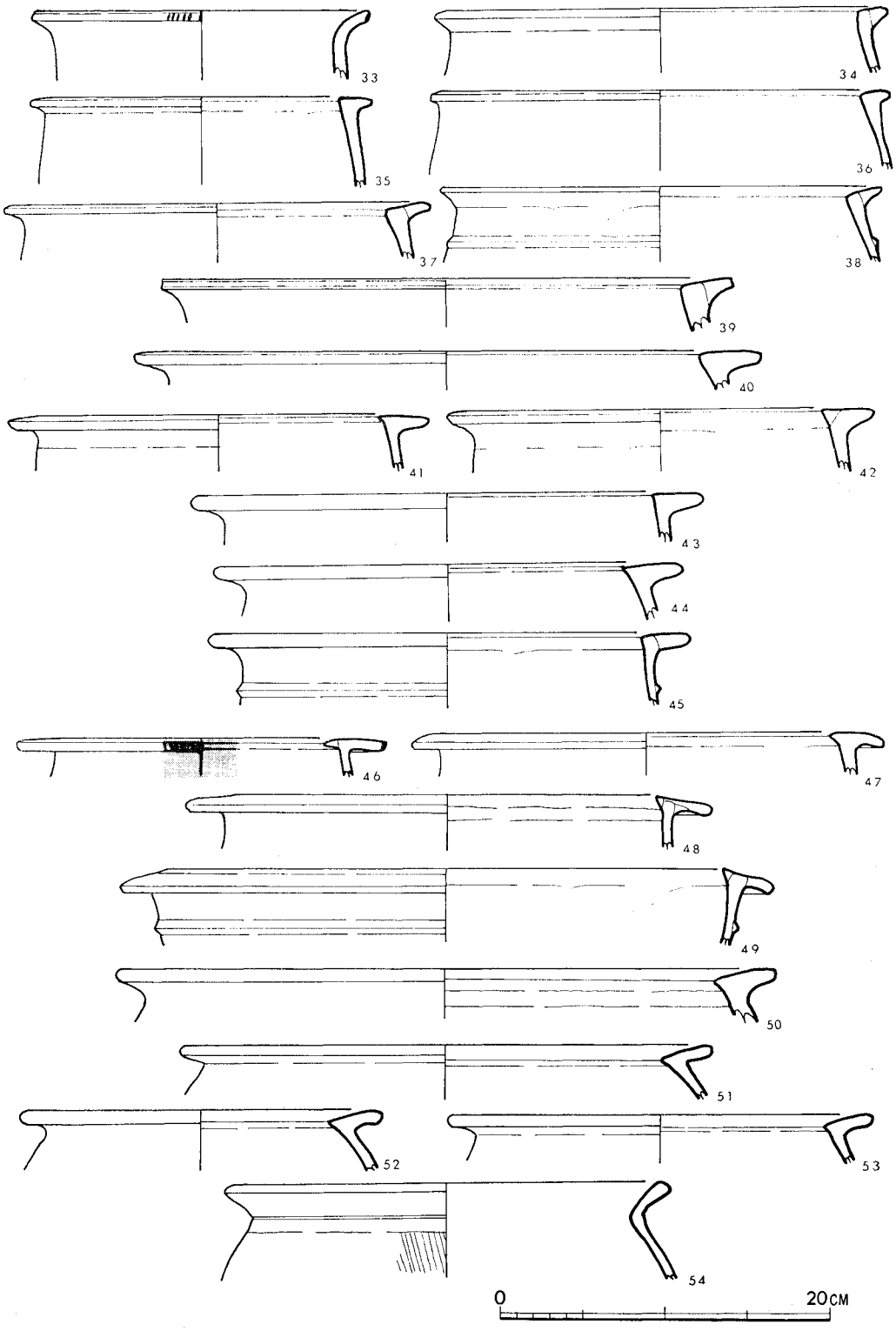
浅鉢（27）　外反する口縁部から胴部で強く屈曲し、急速に底部へとすぼまる器形をもつが底部を欠く。胴部屈曲部外面の稜は強い。内面屈曲部以上と外面は篦で横磨研。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈するが、外面屈曲部付近には一部黒変がある。一応、浅鉢としたが高坏坏部の可能性もある。夜臼式であろう。

底部（28～32）　**28**は底部がわずかに台形状をなす。外面は横、あるいは斜めの貝殻条痕。底部下面には木葉痕がつくが、大部分剝落している。内面には炭化物が付着している。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。夜臼式の深鉢。**29**は直角に近く角張った壺の底部である。底部下面には木葉痕と種子らしい圧痕が残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色。板付Ⅰ式か。**30**は外面に細い刷毛目調整。若干の上げ底を呈する。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、外面赤褐色、内面黒色を呈する。**31**は外面に縦の刷毛目調整で、底部下面は篦のなで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗赤褐色を呈するが、底部下面は黒色、内面は黒褐色。平底。**32**は上げ底。器面があれているために調整不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。**30**～**32**は板付Ⅰ～Ⅱ式の甕であろう。

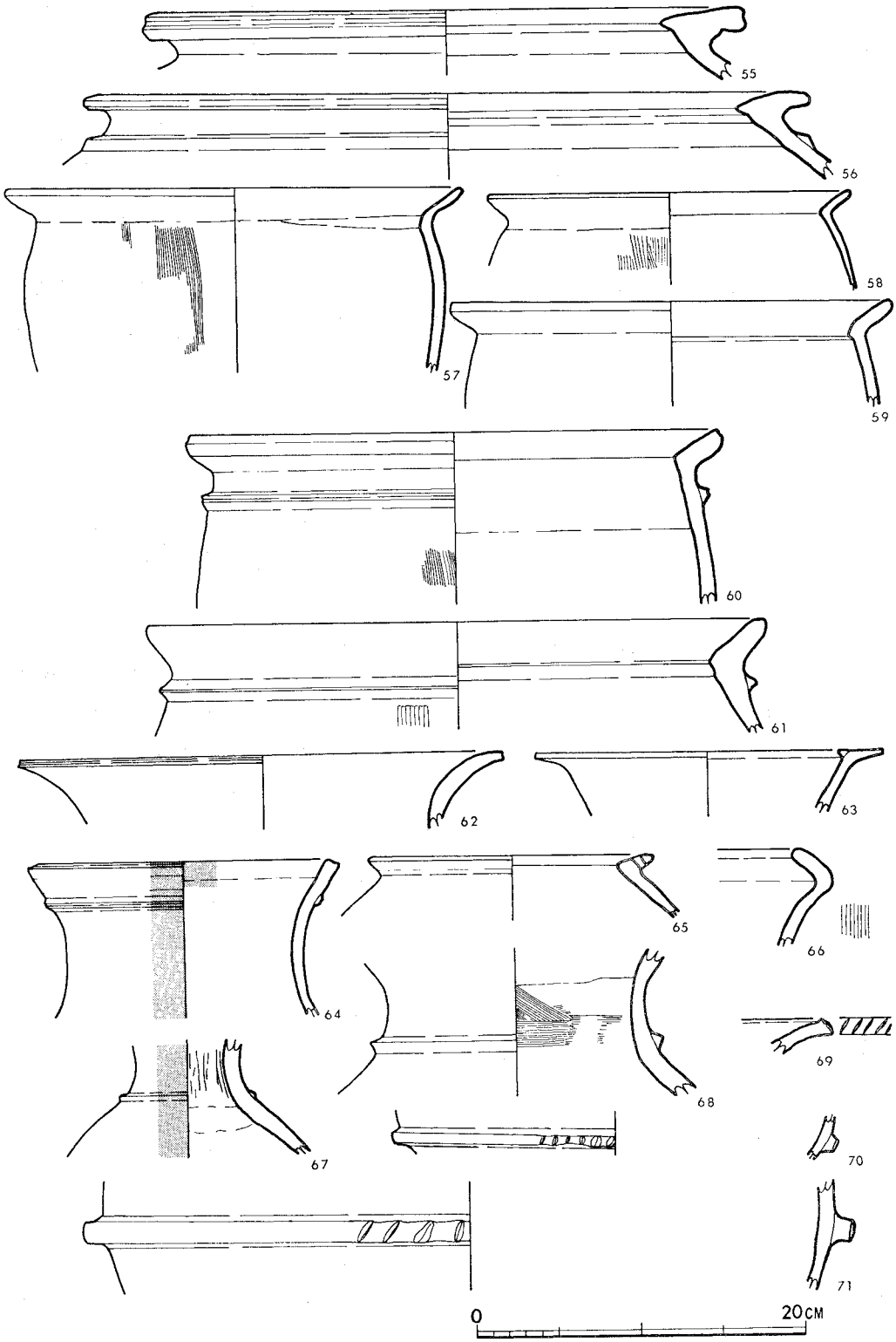
(3)　**上部包含層出土の土器（第9～11図）**

甕（33～61）　**33**は外反する如意状口縁の下端に刺目を施したもので、口縁内外とも横なで調整。胴上部には指の押圧調整。胎土に石英・長石粒を含み、内面黄白色、外面灰色を呈す

る。板付Ⅱ式。34は内傾する口縁の外端が張り出すが未発達で逆「L」字状とまではいかない。口縁内端が下がる。口縁内外面は横なで調整。その内面下部には指の押圧調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄白色を呈する。35も同様な器形だが口縁上面はほぼ水平となる。口縁内外は横なで調整。その内面下部には指の押圧調整。胎土に多量の石英粒を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。36も同様で口縁内端が下がる。口縁内外は横なで調整で、その内面下部には指の押圧調整痕。胎土に石英粒砂を多量に含み、焼成良好。暗褐色を呈する。37も同様だが、外側への張り出しが強く、口縁内端が下がる。口縁内端は凹む。口縁内外面とも横なで調整。その内面下部には指の押圧調整。胎土に石英粒砂、雲母の小片を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。38も口縁内端が下がる同様のものであるが、口縁下に一条の三角突帯が巡る。口縁内外と突帯の貼付部には横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。灰褐色を呈する。39も口縁内端が下がるが、器壁が他に比べ厚い。口唇部は凹み、口縁内外は横なで調整。胎土に石英粒を多量に含み、焼成良好。灰褐色を呈する。40は逆「L」字状に近い口縁をもつ。口縁内端は若干下がるが、張り出しはない。口縁内外は横なで調整。胎土に石茶粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。41も同様の器形であるが、口縁内端がわずかに張り出す。口縁内外は横なで調整。胎土に多量の石英粒砂を含み、焼成良好。灰褐色を呈する。42も同様で、口縁内端張り出しも強くない。口縁内外は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗黄褐色を呈する。43も同様で口縁内外は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。44も同様だが、口縁内端が下がり、弱い張り出しがある。口縁内外は横なで調整。胎土に石英粒を含み、焼成良好。淡灰白色を呈する。以上の34～44は中期初頭～前葉のものであろう。45は逆「L」字状口縁だが、口縁内端の張り出しは弱い。口縁下に一条の三角突帯が巡る。口縁内外と突帯の貼付部は横なで調整。胎土に石英粒砂や砂を混じ、焼成良好。淡赤褐色を呈する。46も逆「L」字状口縁をもち口縁外端とも下がる。口縁外唇には刻目がつけられる。口縁内外は横なで調整。外面は丹塗り。胎土は砂を含むが良好。焼成良好。丹塗り部以外は灰白色を呈する。47も同様の口縁で、外端が強く下がる。口縁内外は横なで調整。胎土に砂粒を含み、焼成良好。外面黒灰色、内面灰褐色。48も同様の口縁だが、口縁内端は下がらない。口縁内外は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄白色を呈する。49は甕というより大型の鉢に近い。口縁部は逆「L」字状を呈するが、口縁外端は強く下がる。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。口縁内外と突帯の貼付部は横なで調整。胎土に砂粒を含み、焼成良好。黒褐色を呈する。以上の45～49は中期中葉のものであろう。50は逆「L」字状口縁に近いが、口縁内端の下がりが弱い。口縁内外は横なで調整。胎土に石若粒や細砂を含み、焼成良好。外面黄褐色、内面淡赤褐色を呈する。51も同様の口縁で、口縁内外横なで調整。胎土に細砂を多く含み、石英粒もみられる。焼成良好。黄白色を呈する。52も同様の口縁、調整をもつ。胎土に石英粒、雲母、細砂を含み、焼成良好。黄灰色を呈する。53も同様の口縁、調整をもつ。胎土に石英粒を含み、焼成良好。黄白色を呈する。54は「く」の字状の口縁で、口縁端は肥厚し丸味をもつ。頸部に一条の沈線がある。口縁内外は横なで調整。胴部外面は粗い刷毛目調整。外面には煤の付着が認められる。胎土は石英粒を含み、焼成良好。外面黄褐色、内面



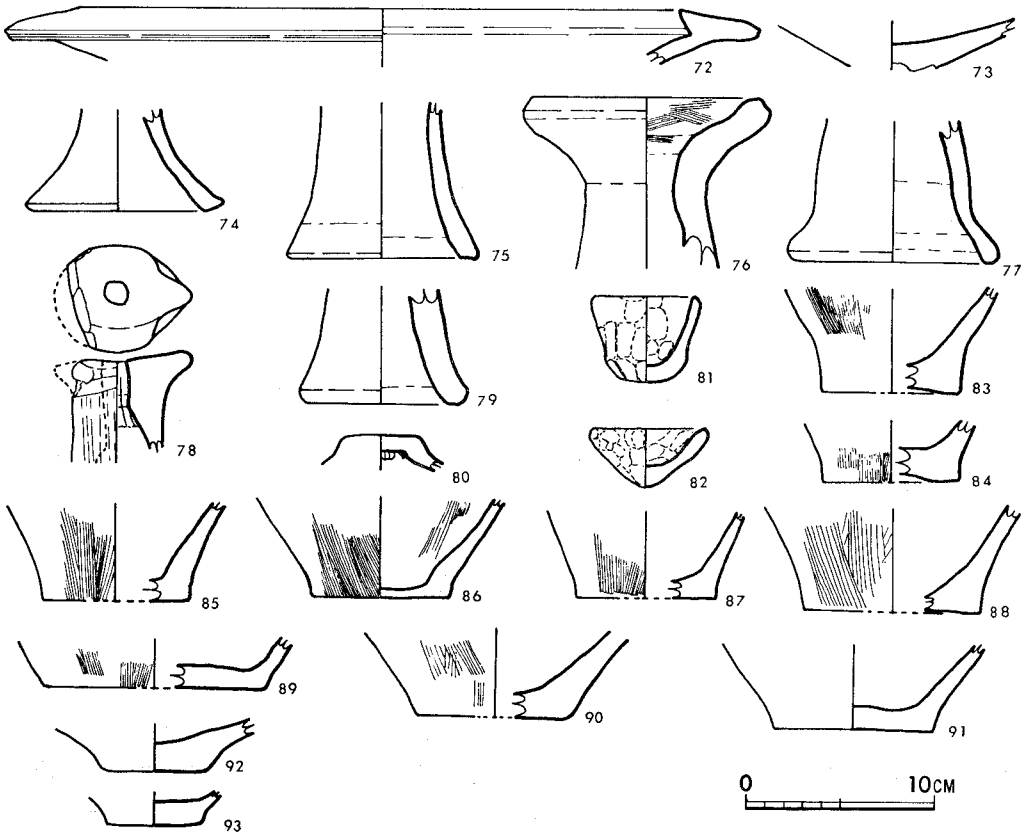
第9図　上部包含層出土土器実測図(1)（$\frac{1}{4}$）



第10図　上部包含層土土器実測図(2)（$\frac{1}{4}$）

淡赤褐色。55は逆「L」字状に近い口縁と、口縁下から急速にふくらむ胴部をもつ。口縁外端は肥厚し、外唇部は凹む。横なで調整を行う。胎土に石英粒、雲母を含み、焼成良好。黄白色を呈する。56も同様の口縁器形をもつが、口縁外端は肥厚せず、若干下がり気味である。口縁下には一条の三角突帯が巡る。口縁内外と突帯貼付部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面黄白色、内面黒灰色を呈する。以上の50～56は54を除き中期後葉のものであろう。57は「く」の字状の口縁をもつが、口縁部はわずかに内湾気味である。口縁内外は横なで調整。胴部外面は縦の刷毛目調整。内面は指の押圧調整の後、なで調整。外面には煤の付着が認められる。胎土に石英粒を含み、焼成良好。黄白色を呈する。58は「く」の字状の口縁をもつ。口縁内外は横なで調整。胴部外面は縦刷毛目調整。胎土は石英粒を含むが良好、焼成良好。灰褐色を呈する。59も「く」の字状口縁だが、屈折部内面に若干の張り出しがある。口縁内外は横なで調整。胎土は石英粒を含むが良好。焼成も良好で外面黄褐色、内面暗黄褐色、黒色。60は「く」の字状口縁下に「M」字状突帯を一条巡らす。口縁外端はわずかに角張り、外唇部も凹む。口縁内外と突帯貼付部は横なで調整。胴部外面は細い縦の刷毛目調整。一部に横なで調整で刷毛目を消している。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗灰褐色、内面赤褐色。61も同様の口縁をもつが、口縁端は丸味を帯びる。口縁下に一条の三角突帯が巡る。口縁内外と突帯貼付部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面淡赤褐色、内面灰白色を呈する。以上の54・57～61は後期前葉の土器であろう。

壺（62～71）　62は朝顔状に単純に開く口縁で、口縁端は角張り、口唇部は凹む。口縁内外は横なで調整。内面口縁近くに黒斑がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡黄白色を呈する。63は「鋤」状口縁をもつ。口縁内外は横なで調整。胎土に雲母、石英粒を含むが良好で、焼成も良い。外面黄白色、内面暗黄褐色。64は長頸の壺で、口縁はわずかに外反しながらたちあがり、口縁端は角張る。口唇はわずかに凹む。口縁下には一条の「M」字状突帯が巡らされる。口縁内面は強い横なで調整。外面と内面の口縁下約1.6cmの所まで丹塗りの痕跡がある。胎土は石英砂を含むが良好で、焼成も良い。淡黄白色を呈する。65は無頸壺である。口縁は「く」の字状に折れ、焼成前の穿孔がある。口縁内外は横なで調整。胴部は器面があれているため調整不明。胎土は石英粒砂を含むが良好。焼成も良い。灰白色を呈する。66は袋状口縁壺である。口縁内面は横なで調整。外面頸部以外は縦刷毛目調整。他の調整は器面があれているため不明。胎土に石英粒を含み、焼成良好、外面黄褐色、内面黄白色を呈する。67は壺の頸部から肩部へかけての破片で、その移行部に一条の三角突帯が巡らされる。頸部内面にはしぼり痕がみられ、突帯貼付部は横なで調整。外面には丹の痕跡がある。胎土には石英粒を含み、焼成良好。灰白色を呈する。68も67と同様部位であるが、より大型である。頸部から肩部への移行部には一条の三角突帯が巡らされる。外面は篦なで調整で突帯貼付部は横なで調整。内面は斜め、横の細い刷毛目調整。外面には一部黒斑がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面黄白色、内面淡黒灰色。69は外反しながら外へ開く口縁部で、口唇部に板状工具（刷毛目原体？）で刻目を入れる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄白色を呈する。70は胴下半部で底部も欠失する。一条の「コ」の字状突帯が巡らされ、その突帯には刻目が施される。突帯



第11図　上部包含層出土土器実測図(3)（$\frac{1}{4}$）

貼付部は横なで調整。胎土は石英粒を含み、焼成は良い。外面黄白色、内面灰白色を呈する。**71**は**70**より大型であるが同様に「コ」の字状刻目突帯が巡らされる。突帯貼付部は横なで調整。胎土は石英粒を多量に含み、焼成良好。外面黄白色、内面灰色。以上の土器は**62**～**65**が中期後葉、**66**～**68**が後期前葉、**69**～**71**は後期後葉の土器であろう。

高杯（72・73）　**72**は「鋤」状口縁の外端が下がり、口唇は凹む。口縁内外は横なで調整。胎土に石英粒、雲母を含み、焼成は良好。暗黄白色を呈する。**73**は口縁を欠くが坏で脚との接合部である。内外面ともなで調整。接合部は凹凸をつけて接合を容易にしている。胎土は石英粒を含むが良好。焼成も良く、外面暗黄褐色、内面淡黄褐色。**72**は中期後葉、**73**は後期のものであろう。

脚部（74）　内外面とも指の調整痕が残り、脚裾部は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。淡灰褐色を呈する。後期のものであろう。

器台（75～79）　**75**は下半部で器面があれているために調整不明。胎土に砂を含み、焼成良好。灰白色を呈する。**76**は上半部で大きく外反する口縁部をもつ。外面は刷毛目調整の上からなでて消している。内面は上部に刷毛目調整痕が残る。胎土に石英粒砂、雲母を含み、焼成良好。黄白色を呈する。**77**は下半部で裾部はわずかに内湾しながら拡がる。裾端部は丸味を帯び

る。内外面とも縦刷毛目調整の後なでて消している。胎土に砂粒を含み、焼成良好。灰白色を呈する。78はいわゆる沓形器台の上半部である。外面は篦の調整で、内面にはしぼり痕がみられる。胎土に石英粒を多量に含み、焼成良好。黒褐色、暗灰褐色を呈する。79は下半部で、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。赤褐色を呈する。いずれも後期のものであろう。

蓋（80）　上部のみで、外面は指で押圧調整。内面にはしぼり痕と、棒状の工具で押圧したような調整痕がつく。胎土は砂を含むが良好で、焼成も良い。黄白色を呈する。後期のものか。

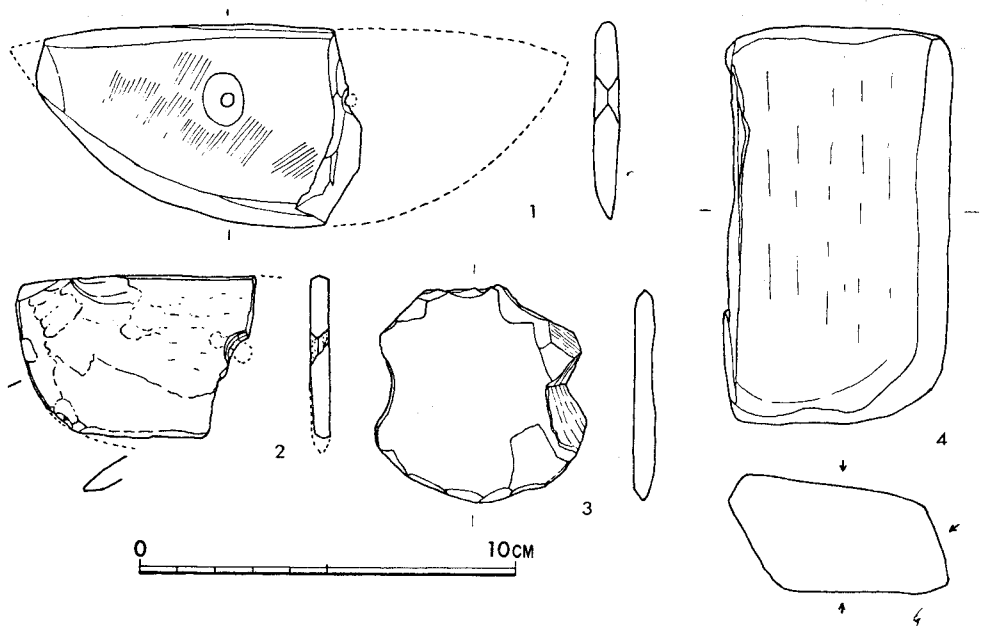
手づくね土器（81・82）　いずれもミニチュアの鉢である。81は口径約5.2cm、器高約4.6cmで、底部は丸味を帯びる。内外面とも指の調整痕が残る。胎土に石英粒を含み、焼成良好。一部外面に黒斑があるが黄白色を呈する。82は81より浅く、口径約6cm、器高約3.2cm。底部は尖底に近い丸底。胎土に砂粒を含み、焼成良好。灰白色を呈する。いずれも後期のものであろう。

底部（83～93）　83～88は甕の底部である。83は若干の上げ底を呈する。外面は縦刷毛目調整だが、底部近くは器面があれて消えている。胎土に砂を含み、焼成良好。暗灰褐色を呈する。84も上げ底で底面は篦で削っている。外面は10本単位の縦刷毛目調整。内面には炭化物が付着。胎土に砂を含み、焼成良好。暗黒褐色を呈する。85は平底で外面縦刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面淡赤褐色、内面灰褐色。86も平底で内外面とも刷毛目調整。内面には指の押圧調整痕も残る。胎土に砂粒、雲母を含み、焼成良好。暗灰褐色。87も平底で、外面刷毛目調整。内面はなで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。灰白色を呈する。88はわずかに上げ底をなす。外面刷毛目調整。内面には炭化物の付着がみられる。胎土に砂を含み、焼成は良は。明灰褐色を呈する。89～93は壺の底部であろう。89は平底で外面縦刷毛目調整。内面は横なで調整。胎土に砂粒を含み、焼成良好。外面淡茶褐色、内面灰白色を呈する。90も平底で外面縦刷毛目調整。内面は刷毛目調整の後なでて消している。胎土は砂粒を含み、焼成良好。一部に黒斑があるが灰白色を呈する。91も平底で、外面は器面があれているために調整不明。内面には指の押圧痕がみられる。胎土に石英粒砂を多量に含み、焼成は良い。灰白色。92は平底であるが、前述のものに比べるとわずかに丸味を感じさせる。内面は刷毛目調整の後なでて消されている。外面の調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。外面黒色、内面灰白色。93も92と同様の器形をもつ。外面は刷毛目調整の後、なで調整。内面には指の押圧痕が残る。胎土に石英粒砂を多量に含み、焼成良好。外面灰白色、内面黄白色。

以上の他にこの包含層中には土師器、須恵器片などとともに中世の土器片もみられる。

(4)　包含層出土の石器（第12図）

1は輝縁凝灰岩製の半月形の石庖丁で、約半分を欠く。孔は2孔で、片方はかろうじて残っている。孔間は3.3cm。刃部は片刃に近い。体部には研磨痕が残る。2も石庖丁である。敲打整形後に研磨しているが、敲打痕の残りが著しい。背面は直線的に作られている。刃はまだつけられておらず、むしろつぶされた様な状況であり、未製品の可能性が強い。1孔がわずかに残るが、あるいは穿孔中に折れたものかもしれない。安山岩ホルンフェルス製。3は石錘であ



第12図　上部包含層出土石器実測図（$\frac{1}{2}$）

ろう。滑石の破片の周囲を打ち欠いて形を整え、対応する両端を深く打ち欠いて糸掛け部を作る。この打ち欠きは両面とも逆の方向から行う。重量36g。**4**は砂岩製の砥石で3面を利用している。

4　まとめ

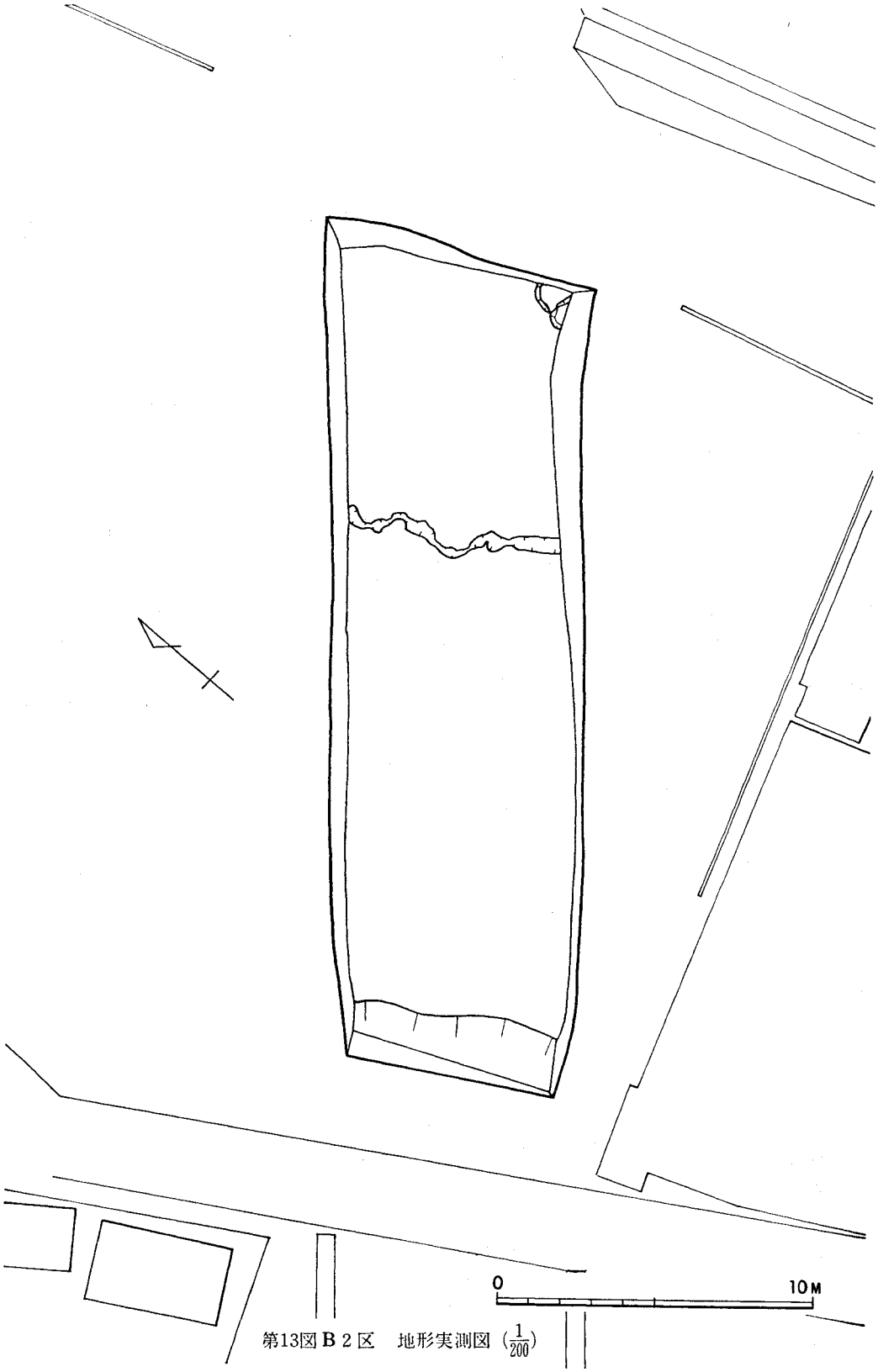
以上のようにA5区の調査では弥生時代と思われる溝2本と夜臼式期の溝1本、ピット3個、および弥生時代初頭の小河川跡の一部が発見された。隣接するG－7a・G－7b地点での1978年度調査により当時の水田面が明らかにされ、排水のための溝も検出された。この溝中から夜臼式土器に混じ、石鎌未製品や木製鍬の未製品なども発見された。A5区の第2号溝がこれにつながるものである。第3号溝の用途は不明。G－7a地点では水田の排水施設も発見されており、第2号溝の杭・矢板列と西側の溝状のものが、あるいはそうかもしれない。しかしながら調査の不備のため完掘しておらず詳細は不明である。

出土した土器はその層位で上部包含層、褐色粗砂層、青灰色砂質土層に分離したが、土層観察に失敗したため、特に青灰色砂質土層に上部の土器が混入してしまった。1978年度調査ではこの層の土器包含層が二つに分離されており、夜臼式土器の細分を可能にしている。今回の調査ではこの青灰色砂質土層上にあったと思われる弥生時代初頭の水田址や、この下層の夜臼式期の水田址も調査のミスにより検出することができず、悔を残すこととなった。なお褐色粗砂層も板付Ⅱ式を含むが、この土器も上部出土であり、本来は夜臼・板付Ⅰ式共伴の層であろう。

A5区は道路敷という制約を受けているため上部で幅8m、下部では5mという細長いトレンチの調査であった。このトレンチは沖積地でもあり、土層に砂の堆積が多く、旧河川跡など

湧水のために壁の崩壊が起こりやすく調査は難航した。また調査費・調査期間とも充分とはいえず、そのために満足な調査ができなかった。

今回の調査のミスを今後の教訓としていきたい。



第13図 B 2 区　地形実測図 ($\frac{1}{200}$)

Ⅱ　B２区の調査

1　調査概要

Ｂ２区は通津寺の東南方約80ｍの位置にあたり、大正５年、銅剣、銅矛が発見された田端遺跡と推定されている。現地はすでに大正５年の土取りの際に１～２ｍ削平されて水田となっていたが、現在は植木畑である。古老の話ではＢ２区の北側に円墳状の高まりがあり、銅剣、銅矛を副葬した甕棺はそこから出土したらしい。また同時に出土した大石はＢ２区の北方の板付部落の共有地に置かれていた。このようにＢ２区はすでに削平をうけてはいるが、甕棺墓地の可能性があり調査を実行した。

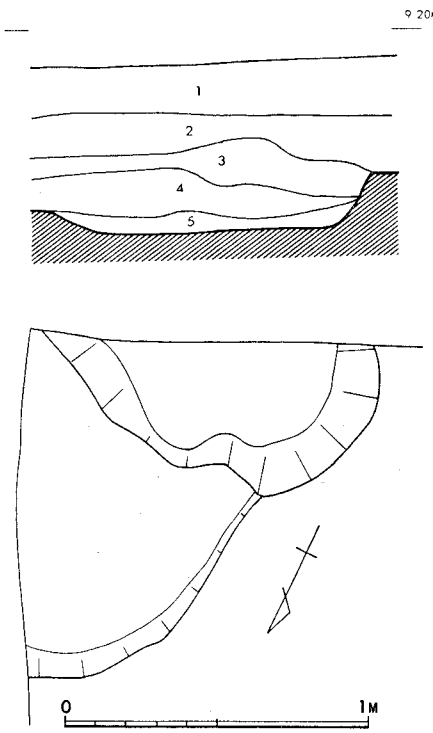
調査は道路敷地の関係上、幅約８～９ｍ、長さ約26ｍの全体をユンボで排土した。上部には約35～40cmの暗褐色粘質土（植木畑の耕作土）、約60cmの花崗岩バイラン砂土で埋土されていた。その下に大正４年の水田耕作面である黒褐色粘質土が約20cm程あり、約15cm程の水山床土である暗黄褐色ローム土（埋土）が続く。結局Ｂ２区は、烏栖ローム層が完全に除去され、その下層である八女粘土層まで削平されていた。そのために遺構はほとんど残っておらず、わずかにトレンチ東南端の弥生式土器を混入する竪穴、西端に近代まで使用されていた溝、中央やや東寄りに自然の流路とみられる小溝が検出されたにとどまった。なお、昭和53年度にＢ２区の北側が宅地造成されるために緊急調査を行ったが、その際、弥生時代中期末～後期初頭の井戸跡一基が発見されている。

2　遺　構

竪穴状遺構（第14図）

トレンチ東南端に存在するもので、２つの竪穴が切りあったような恰好をしており、土層の堆積でもそのようで、もし切り合いならば南側の方が古い。全掘はしておらず、全体の形状はつかめない。現存の深さは南側で約17cm、北側で約10cm程である。覆土中に弥生土器が含まれており、図示できないが弥生時代後期のものと推定され、この時期のものであろう。

1 黒褐色粘質土（旧耕作土）
2 暗黄褐色ローム土（卵形の固形物を多量に含む）
3 灰色粘質土（f.S～G.Sを多く含み、F.e・卵状固形物も同様である）
4 灰褐色ローム・粘土混り土（Ⅱ層に灰色粘質土を含むものと同様、他は同様の異物を混じる）
5 淡灰色粘質土（非常に粒子が細かく、粘性もまた同様）



第14図　竪穴状遺構実測図（1/25）

Ⅳ　おわりに

県道505号線新設改良に伴う調査の成果をまとめると

1.　若干ながら先土器時代の遺物が発見されており、その時代の居住が知られるが包含層そのものは消滅している。

2.　1978年度の調査による追認ながら、西側沖積地に夜臼式期の溝と、その単純層が確認された。〔山崎1978ａ・ｂ・ｃ〕

3.　袋状竪穴の分布は環溝最南部より更に南へ延びている。また調査地内でに比較的遺構の残存状態の良かった西側斜面Ａ４区には袋状竪穴は存在しない。

4.　中期初頭の住居址が西側Ａ４区で検出されたが、この地区は環溝外西南部にあり、その当時には環溝はその機能を失っていると考えられる。

5.　田端遺跡はこの道路敷地内ではほぼ完全に消滅している。

6.　Ａ４区第１号井戸址は中期後葉～後期初頭の土器の良好な資料を出土したが、この井戸はＧ－５ａ地点第10号竪穴とした井戸址〔山口1976〕と同じくその底近くに大型の甕の破片を敷いていた。

7.　Ａ４区で古墳時代の土器を伴う土坑２、小ピット１があったが、これはあるいは住居址の貯蔵穴であったとも考えられる。

8.　Ａ１区、Ａ３区の地下式横穴は中世のもので、この地域に群集しているものと思われる。なお周辺では諸岡遺跡に類例〔横山・後藤1975〕がある。

以上のように県道敷地内調査は板付遺跡内の弥生集落の性格を知る上に貴重な資料を提供した。しかしながら、この調査によって貴重な遺跡が消滅したこともまた事実である。しかもこの県道開通により史跡指定地である道路北側はともかくとして、県道南側や西側水田部のＧ－７ａ・７ｂ地点や田端遺跡など開発申請が相ついでいる。板付遺跡とは史跡指定地だけではなく、それ以外も含めてはじめて言えるものであり、我々文化財行政に携わる者もそのことを深く考える必要があろう。

参 考 文 献

板付遺跡保存会（1968）板付遺跡　福岡

後藤直・横山邦継（編）（1975）板付周辺遺跡調査報告書（２）　福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集　福岡

後藤直・沢皇臣（編）（1976）板付―市営住宅建設にともなう発掘調査報告書―1971～1974　福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　福岡

沢皇臣・山口譲治・原俊一（編）（1977）板付周辺遺跡調査報告書（４）　福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集　福岡

沢皇臣・横山邦継（編）（1977）板付　県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書　福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集　福岡

下條信行（1970）福岡市板付遺跡調査報告　福岡市埋蔵文化財調査報告書第８集　福岡

杉原荘介（1977）日本農耕社会の形成　東京

中山平次郎（1917）銅鉾・銅剣の新資料　考古学雑誌第７巻第７号　東京

森貞次郎・岡崎敬（1961）福岡県板付遺跡　日本・農耕文化の生成　東京

山口譲治（編）（1976）板付周辺遺跡調査報告書（３）　福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集　福岡

山崎純男（1978ａ）最古の水田（福岡市板付遺跡の調査）　ふるさとの自然と歴史第88号　福岡

山崎純男（1978ｂ）福岡市板付遺跡の縄文時代水田址　月刊文化財181号（1978年10月号）　東京

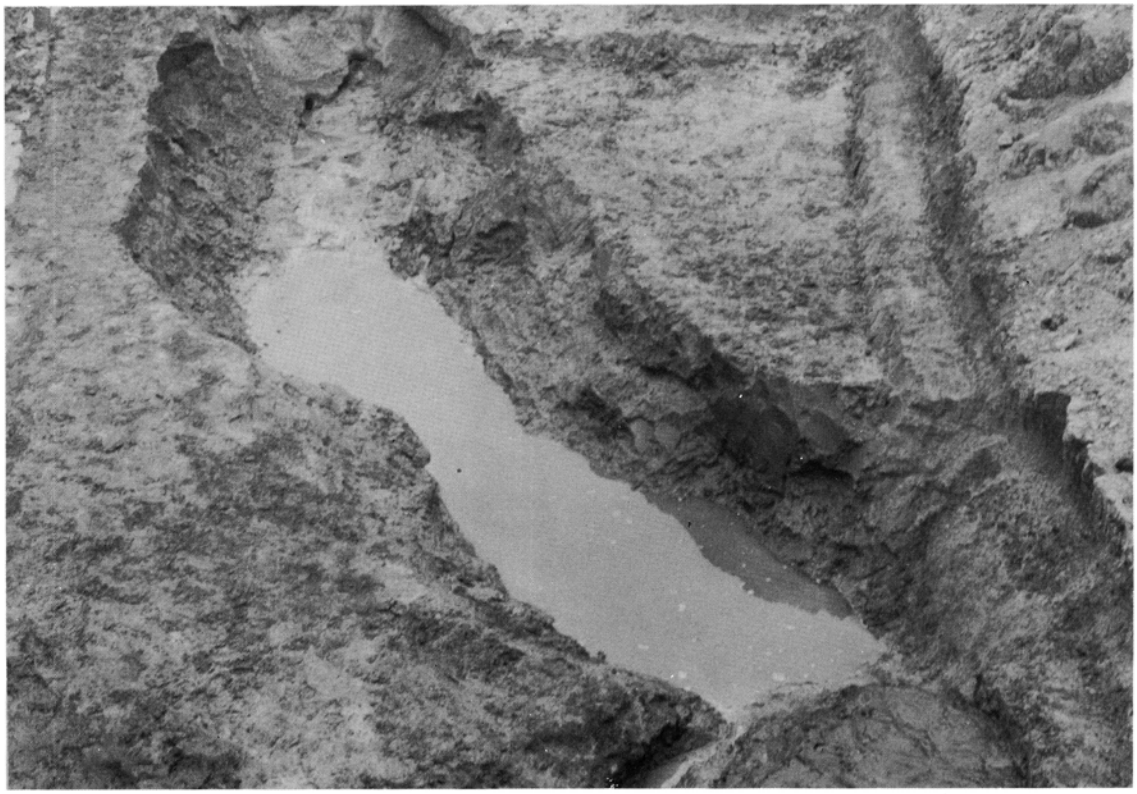
山崎純男（1978ｃ）福岡県板付遺跡の水田（縄文晩期）　日本考古学協会昭和53年度大会研究発表要旨　東京

調 査 主 体

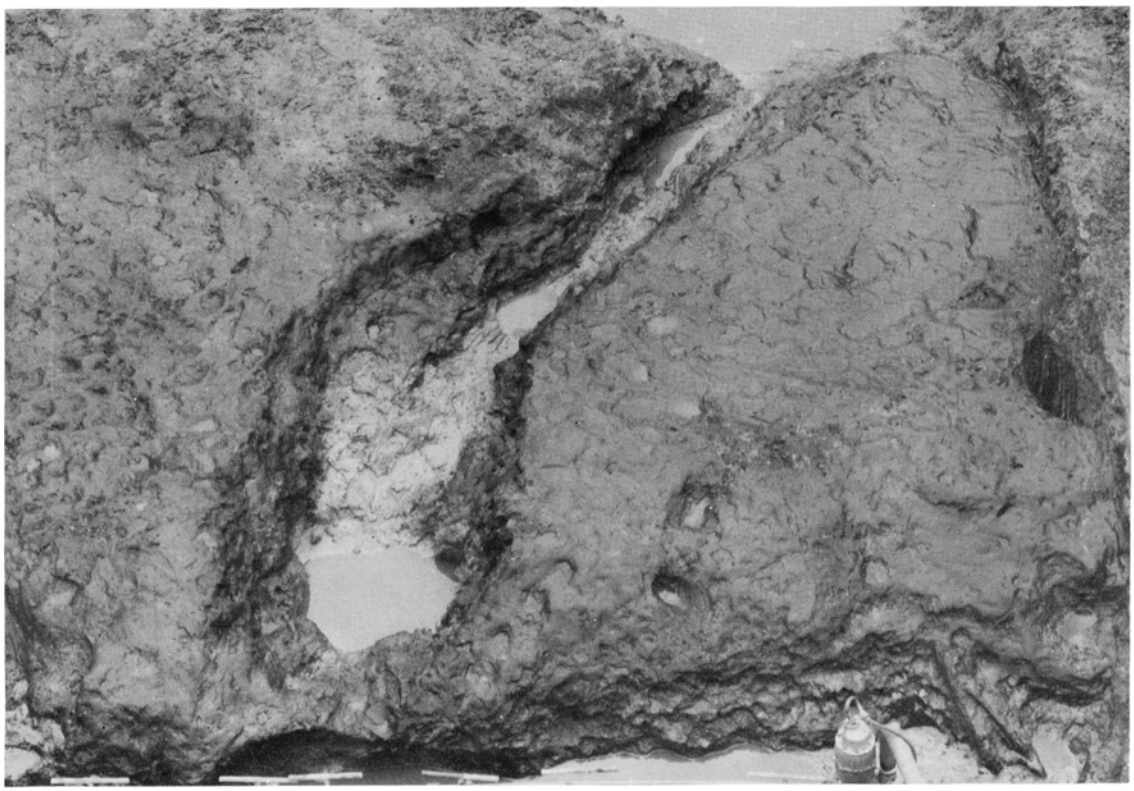
福岡市教育委員会

戸田成一・志鶴幸弘・井上剛紀・楢崎幸利・安田正義・河鍋好輝・山崎純男・沢皇臣・横山邦継・山口譲治

図　　版



A 5 区第 1 号溝（東から）

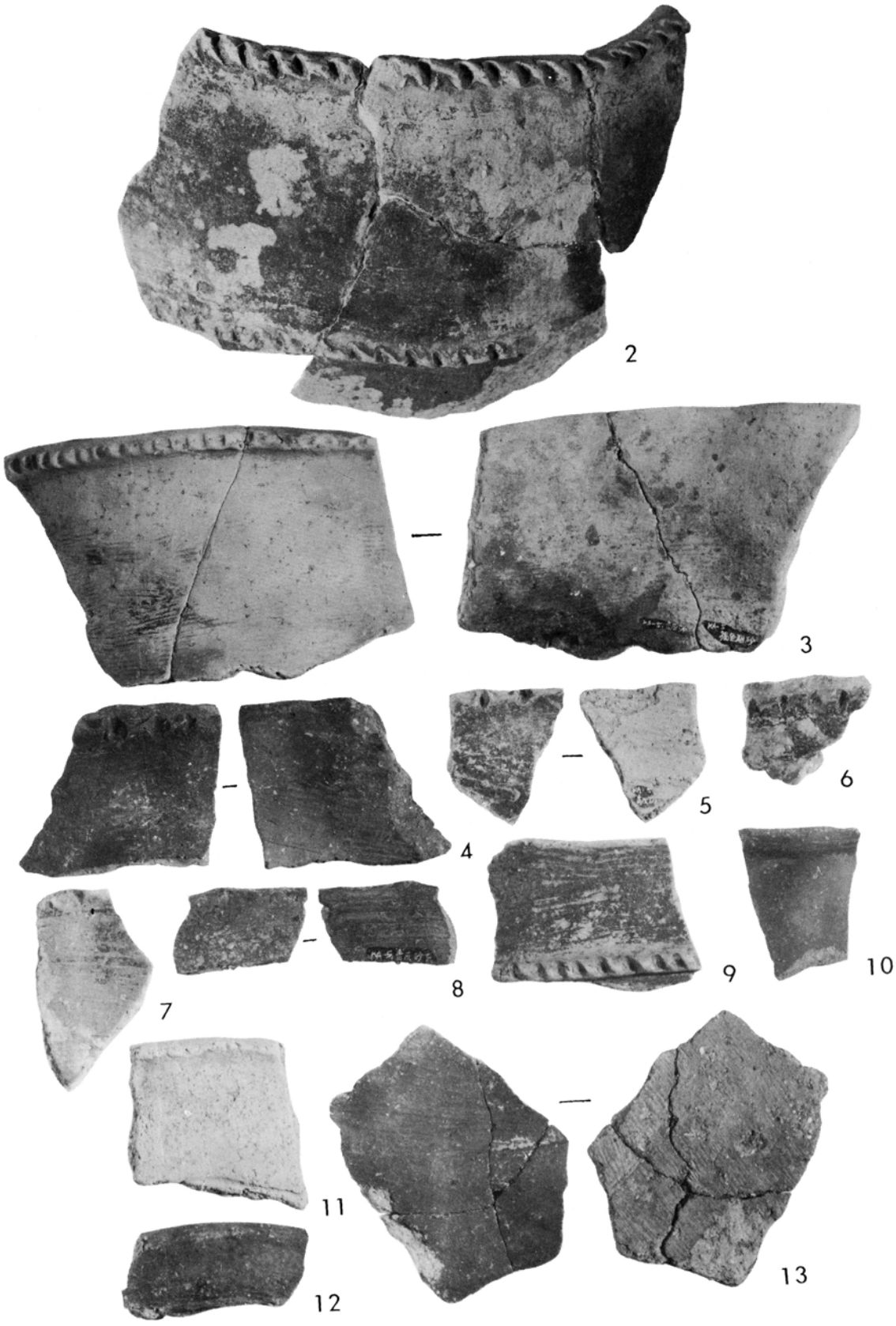


A 5 区第 3 号溝（東から）

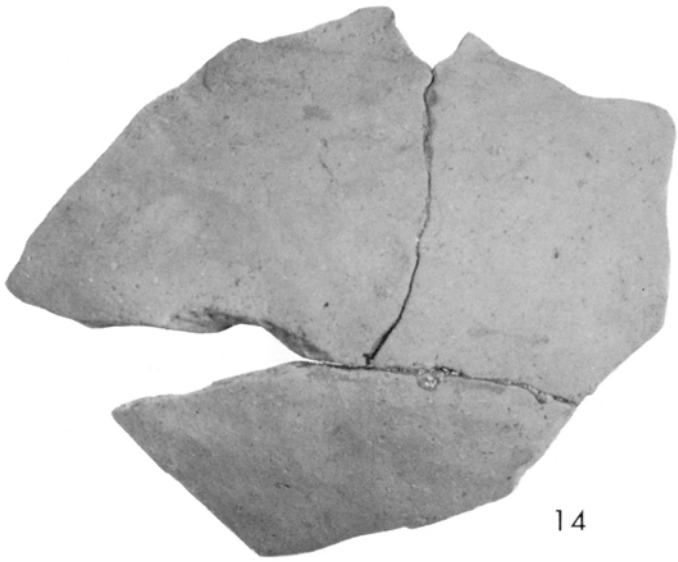
A 5 区第 2 号溝（北から）

1

A 5 区青灰色砂質土層出土土器

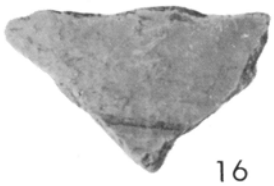


A 5 区青灰色砂質土層出土土器



14

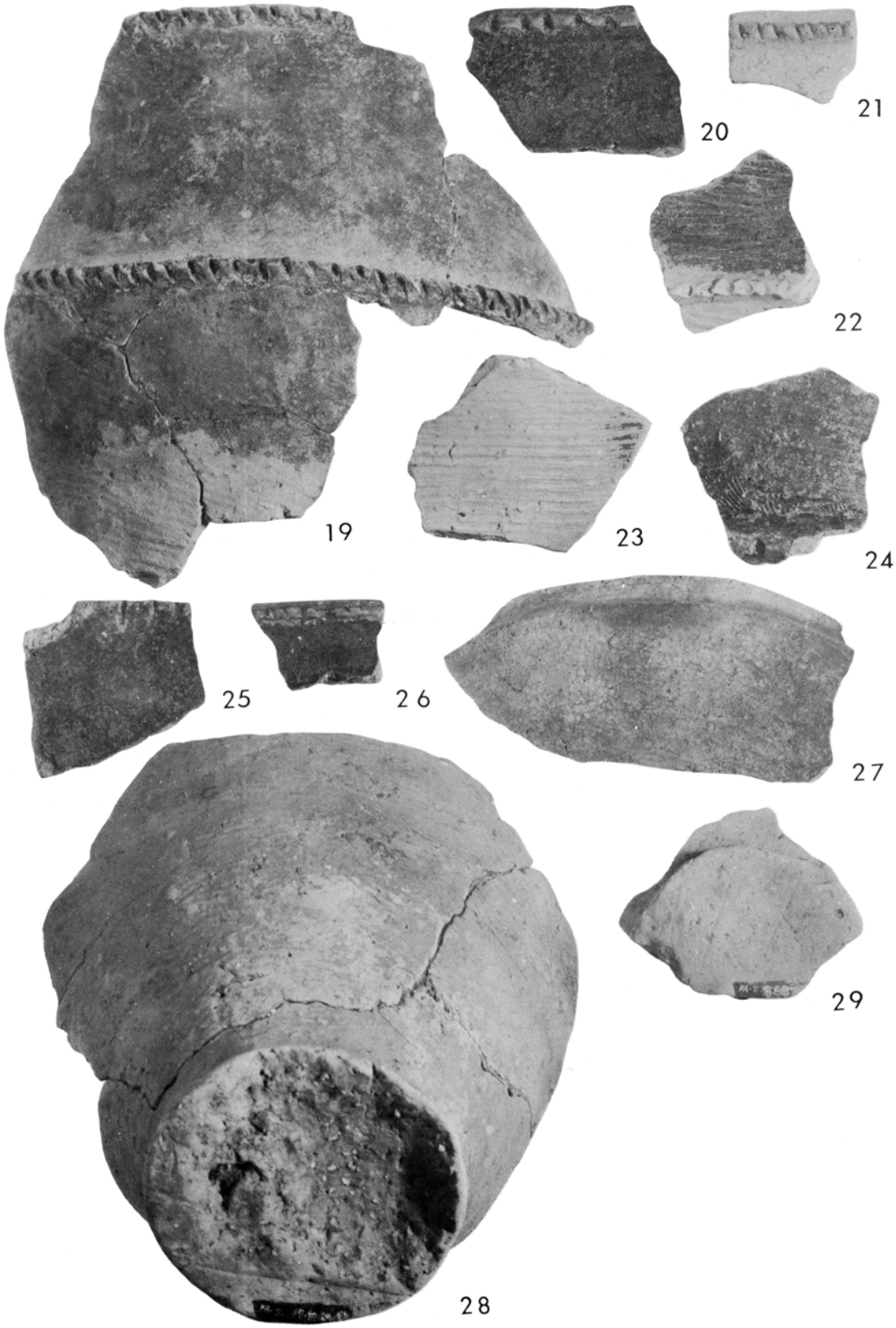
15



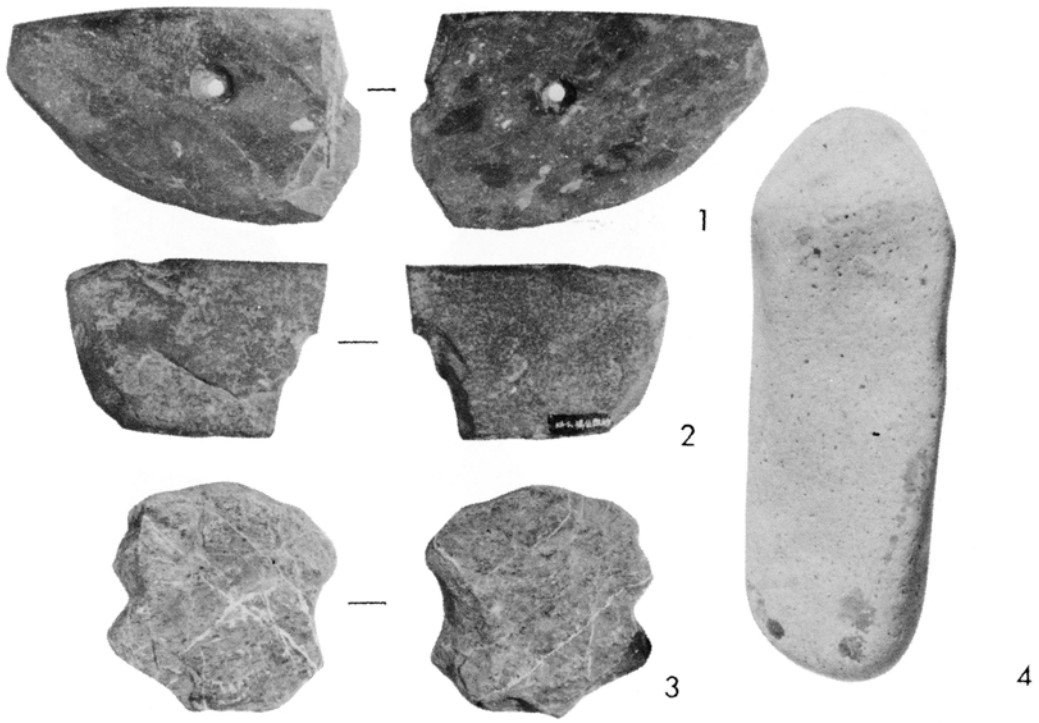
16

18

A 5 区褐色粗砂層出土土器



A 5 区褐色粗砂層出土土器



A 5区上部包含層出土石器

B 2区トレンチ（東から）

B２区トレンチ東測（北から）

B２区トレンチ西側（北から）

編集　福岡市教育委員会文化課板付遺跡調査事務所
福岡市博多区板付２丁目11—１
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８—１
印刷　株式会社 川島弘文社